

「ダンスの授業の楽しさ」 に関する因子分析的研究 —高校生を対象として—

畑野 裕子

I 目的

学習指導要領の体育の目標では、運動への愛好的態度や主体的立場を育てることが強調されている。ダンス教育を考える場合も同様に、生涯を通じて主体的立場からダンスに親しめる能力や態度を育てることが必要であると考え。そのためには、ダンスの楽しさを学習者ひとりひとりのものとしてできるように、学習者の立場から、楽しさをより具体的かつ客観的な形で明らかにしていく必要がある。前報ではこのような観点から、「ダンスの授業の楽しさ」を構成する因子を明らかにするために、大学生¹⁾、中学生²⁾、を対象として因子分析を試みた。本研究では、高校生を対象として、次の2点について明らかにすることを目的として

表1 ダンスの授業の楽しさに関する因子分析結果

測定項目	F1	F2	F3	F4	F5
10 イメージとからだの動きが一致したとき	.691	.231	.170	.173	.127
14 動きと音楽の調和がとれたとき	.614	.183	.143	.210	.117
5 上達していくのがわかるとき	.612	.231	.140	.235	.176
16 踊って人に感動を与えたとき	.581	.253	.242	.170	.143
18 踊りの内容を理解して動けたとき	.582	.274	.194	.091	.240
21 そのものになりきって動いているとき	.566	.254	.318	.106	.205
12 自分の役割が果たせたとき	.534	.198	.142	.182	.256
20 美しく踊れたとき	.530	.200	.191	.250	.153
2 感情を込めて踊っているとき	.521	.221	.301	.229	.188
29 自分の動きと相手の動きがマッチしたとき	.521	.311	.144	.265	.165
82 ふだんの自分とは違ったことができるとき	.276	.692	.198	.220	.180
81 ふだん話をしない人と話できたとき	.225	.676	.018	.141	.248
83 自分たちの意図したことが、みている人に伝わったとき	.386	.640	.197	.098	.170
78 みんなにできない動きができたとき	.315	.569	.180	.321	.138
76 動きでコミュニケーションができたとき	.303	.569	.143	.187	.150
64 自分のしらない自分がわかったとき	.224	.560	.147	.190	.080
79 ダンスをしてからだの調子がよくなったとき	.290	.537	.109	.244	.159
73 他の人の視線を感じて踊っているとき	.106	.153	.742	.128	.081
13 人前で発表しているとき	.326	.065	.675	.115	-.011
59 一人で発表するとき	.063	.031	.668	.005	.122
67 見本を見せているとき	.066	.240	.575	.126	.198
15 グループのリーダーになったとき	.165	.039	.575	.110	.216
35 流行の音楽で踊るとき	.105	.150	.068	.685	.140
3 ビートのきいた音楽にのって踊っているとき	.330	.130	.204	.610	.027
30 速いテンポで踊っているとき	.326	.181	.233	.600	.066
66 リズミカルに踊っているとき	.300	.385	.213	.582	.008
51 リズムにのれたとき	.382	.294	.151	.538	.055
54 先生と一緒に踊っているとき	.110	.227	.257	.123	.587
6 先生がはりきっているとき	.266	.063	.208	.104	.570
19 先生の踊りをみているとき	.258	.102	.119	-.006	.570
61 先生の教え方がおもしろいとき	.221	.292	.078	.223	.521
分散寄与率	41.6	3.5	3.3	2.4	2.1

(注) F1-F5に含まれなかった項目は記載していない。

いる。

1 ダンスの授業の楽しさの因子を明らかにする。

2 ダンスの授業の好き嫌い、楽しさについての感じ方を明らかにする。

II 方法

1 対象

調査対象者は、体育の授業でダンス教材を学習済みの者(818名)であった。ダンスの授業における学習内容は、①ジャズダンス等のリズムを主とした動きによるウォーミング・アップ、②簡単な動きづくり、③作品の発表(課題学習も含む)等であったが、学習内容ごとに、対象者を分類・区別するには至らなかった。

2 調査内容

1) 質問紙・評定項目：質問紙・評定項目については、大学生、中学生を対象とした調査と同様であった。回答形式は、ダンスの授業の楽しさの質問項目については、リッカート・タイプの7段階評定とし、ダンスの授業に対する好嫌度について

は、リッカート・タイプの5段階評定とした。
 2) 調査方法：授業担当者が調査者となり、主として集合的方法により実施し、他に個別的な留置法も行った。なお、回答は無記名とした。

3) 調査期日：昭和62年1月～6月に実施。

4) 回答結果の処理：回収した調査用紙のうち、記入漏れや回答が一律な回答者、及び同一質問項目における反応得点が2段階以上異なる回答者は回答の信頼性に疑いがあるものとして除外した。その結果、有効回答者数は720名であった。

「ダンスの授業の楽しさ」に関する因子を検討するために、因子分析法(主因子解法→ノーマルバリマックス回転)を用いた。因子抽出の基準は、個有値1.0以上とし、さらに、同一項目が特定の因子に0.5以上の負荷量を示し、同時に他の因子に0.5以上の負荷量を示さないことを基準にして因子の解釈・命名を行った。なお、統計処理は、大阪大学大型計算機センター「SPSS統計パッケージ第9版」³⁾を用いた。

Ⅲ 結果

1 ダンスの授業の楽しさに関する因子分析

因子の解釈・命名は、次のように行った。

第1因子に高く負荷した項目を、ダンスの授業やダンスの創作過程における、学習者の、技能的・認知的・社会的課題達成の楽しさと解釈し、第1因子を「達成の因子」と命名した。なお、分散寄与率は34.5%であり、最も高かった。因子の解

釈・命名は第1因子と同様に、以下第2因子から第5因子まで、各々「非日常性」「脚光」「リズム」「指導」と命名した(表1参照)。なお、これら5因子の累積分散寄与率は、52.8%であった。表1は、これら5因子の命名と分散寄与率の結果を示したものである。

2 ダンスの授業の好嫌別にみた楽しさの分析

ダンスの授業に対する好嫌度の異なる生徒を対象として、抽出された6因子の楽しさ得点を比較検討した。まず、ダンスの授業に対する好嫌度評定(5段階評定)に基づき、「好き」「どちらかといえば好き」をダンス好き群(n=347)、「嫌い」「どちらかといえば嫌い」をダンス嫌い群(n=163)、「どちらともいえない」を中間群(n=210)とした(以下、好き群、嫌い群、中間群と略す)。

抽出された6つの楽しさ因子(因子負荷量.5以上)を特徴的に構成している各項目の評定値を求め、これを「ダンスの楽しさ得点」(得点可能範囲は1～7点)とした。表2は、算出された因子ごとの楽しさ得点の平均値と標準偏差を群別に示したものである。

各因子ごとの楽しさ得点をもとに、ダンスについての好嫌群(3)×楽しさ因子(5)の2要因分散分析を行い(ただし第2要因は被験者内要因である)、その結果を表3に示した。

ダンスに対する好嫌群の主効果が有意であり、さらにテューキー法による多重比較を行ったとこ

表2 各群における楽しさ得点の平均値

群	達成	非日常性	脚光	リズム	指導
好き群 (N=347)	4.93 (0.92)	4.76 (1.09)	2.68 (1.06)	5.04 (1.04)	4.32 (0.95)
中間群 (N=210)	5.33 (0.77)	5.26 (0.91)	3.40 (1.05)	5.61 (0.79)	4.71 (0.97)
嫌い群 (N=163)	5.87 (0.76)	5.65 (0.88)	4.05 (1.07)	6.14 (0.79)	5.07 (0.96)

注) () 内の数値は S.D を示している。

表3 ダンスの好嫌群(3)×楽しさ因子(5)の分散分析の結果

変動因	SS	df	MS	F	
被験者間					
好嫌群(A)	554.291	2	277.146	114.921	**
Er(a)	1729.134	717	2.412		
被験者					
因子(B)	2065.643	4	516.411	1082.509	**
A×B	25.973	8	3.247	6.806	**
Er(ab)	1368.179	2868	0.477		

**p<.01

ろ、好き群>中間群>嫌い群の順に楽しさ得点が高く、群間の差はいずれも有意であった。(以下、>で示す大小関係は、テューキー法による多重比較の結果、 $p < .01$ で有意差が認められたものである。)

さらに、楽しさの因子の主効果が有意であったので、多重比較を行ったところ、リズム>達成>非日常性>指導>脚光の因子順に楽しさ得点が高かった。

また、好嫌群×因子の交互作用が有意であり、下位検定の結果⁵⁾、群別の単純主効果が有意であった。そこで群ごとに5つの因子における楽しさ得点について多重比較を行った。好き群、中間群、嫌い群のいずれの群でも楽しさ得点の高い順に、リズム>達成>非日常性>指導>脚光であった。さらに、楽しさ因子の単純主効果も有意であったので、楽しさの因子ごとに3群の楽しさ得点について多重比較を行ったところ、いずれの因子においても、楽しさ得点の高い順に、好き群>中間群>嫌い群であった。

IV 考察

高校生を対象として、ダンスの授業の楽しさの因子分析、ダンスに対する好嫌別にみた楽しさの感じ方に関する分析を行ったが、

まず第一に、因子分析で明かにされたダンスの授業の楽しさの因子について考察することとする。

本研究では、「達成」「非日常性」「脚光」「リズム」「指導」の5因子を抽出したが、これら5因子のうち千駄⁴⁾の抽出した他の運動種目の楽しさの因子と共通するものは、達成、脚光、指導であった。逆に、非日常性、リズムの楽しさ因子は、他の運動種目では認められない因子であり、ダンス独自の楽しさであると推察できる。

これらダンス独自の楽しさ因子と推察される因子を、これまでの研究と比較する。大学生を対象とした場合は、表現、リズム、鑑賞、新しさの5種類の因子がダンス独自の楽しさとして報告され¹⁾、また、中学生の場合は、表現、鑑賞の因子がダンス独自の楽しさとして報告された²⁾が、これらの結果と比較してみると、今回は非日常性が新た

な種類の因子として明らかになった。

第二に、ダンスの授業に対する好き嫌いの程度の異なる生徒について、楽しさに対する感じ方についての異なる差異が認められたかについて検討する。

楽しさの感じ方の程度としては、5因子の中でリズムが最も高く、次に達成であったことから、実際の授業場面における高校生にとって楽しいのは、音楽のリズムによって踊ることや、技能的向上や、認知的・社会的課題の達成であることが推察される。

また、脚光の楽しさは第3因子として抽出されたが、その感じ方は5因子中最も低く、このことは、中学生を対象とした研究結果と同様であり、ダンスの授業の中では意味づけされているものの、どちらかといえば楽しくないと感じていると考えられる。

なお、本研究では、高校生を対象とした場合の概括的な意味でのダンスの授業の楽しさを明らかにすることを試みたが、さらに、学習内容や教師に関わる諸要因などを含めた場合の検討や、学習課程にフィードバックできる尺度作成などは、今後の課題としたい。

V 文献

- 1) 畑野裕子「「ダンスの授業の楽しさ」に関する因子分析の試み」舞踊学, 10-1:12-13, 1987
- 2) 畑野裕子「ダンスの授業の好嫌を規定する楽しさ要因の検討—中学生を対象として—」兵庫教育大学研究紀要, 8:133-148, 1988
- 3) 三宅一郎・中野嘉弘・水野欽一・山本嘉一郎, SPSS 統計パッケージⅡ解析編, 東洋経済新報社, 1977, pp.13-33
- 4) 千駄忠至「体育の学習指導における運動の楽しさの評価」体育科教育学研究, 5:12-21, 1985
- 5) 山内光哉「3要因混合計画(1要因が繰り返しの測定値の場合)における重みづけられない平均値分析法の単純効果の検定について」九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 22-2: 53-67, 1978